

## 平成30年度第2回ハタハタ資源対策協議会資料

表1 秋田県における漁獲枠と漁獲実績の推移

年	沖合			沿岸			合計		
	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)
平成7年	85	54	63	85	89	104	170	143	84
8年	110	86	78	110	157	143	220	243	111
9年	180	148	82	180	280	155	360	428	119
10年	300	162	54	300	438	146	600	599	100
11年	400	142	36	600	580	97	1,000	722	72
12年	400	265	66	600	902	150	1,000	1,166	117
13年	520	506	97	780	986	126	1,300	1,493	115
14年	680	384	57	1,020	1,570	154	1,700	1,954	115
15年	960	907	94	1,440	2,051	142	2,400	2,958	123
16年	1,000	707	71	1,500	2,349	157	2,500	3,055	122
17年	1,000	489	49	1,500	1,867	124	2,500	2,356	94
18年	800	944	118	1,200	1,640	137	2,000	2,584	129
19年	720	847	118	1,080	765	71	1,800	1,612	90
20年	1,200	868	72	1,800	2,035	113	3,000	2,903	97
21年	1,040	1,054	101	1,560	1,475	95	2,600	2,530	97
22年	960	457	48	1,440	1,277	89	2,400	1,734	72
23年	1,120	677	60	1,680	1,287	77	2,800	1,964	70
24年	1,080	376	35	1,620	931	57	2,700	1,307	48
25年	768	624	81	1,152	898	78	1,920	1,522	79
26年	672	285	42	1,008	940	93	1,680	1,225	73
27年	320	438	137	480	686	143	800	1,124	141
28年	320	450	141	480	393	82	800	844	105
29年	290	241	83	430	240	56	720	481	67

※ 平成9年以降は、沖合は管理漁期(9月～翌6月)、沿岸は漁期(11月～翌1月)の合計値（水産漁港課調べ）

◎H29年漁期の配分枠に対する実績は、沖合83%、沿岸56%、全体で67%であった。

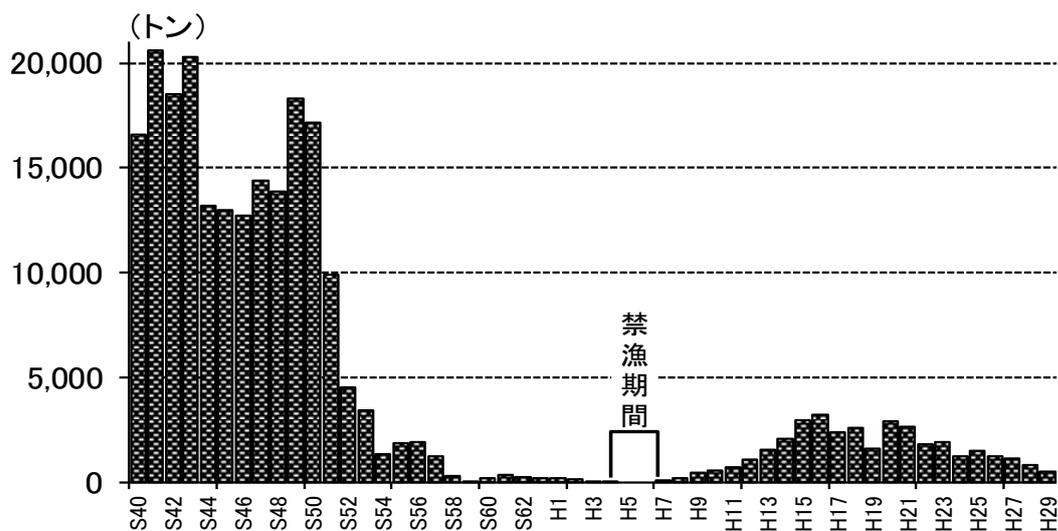


図1 秋田県におけるハタハタ漁獲量の推移

(1-12月漁獲量: H28年までは農林水産統計、H29年は水産漁港課調べ)

◎H29年1～12月の本県漁獲量は524トンで、前年に比べて311トン減少した。

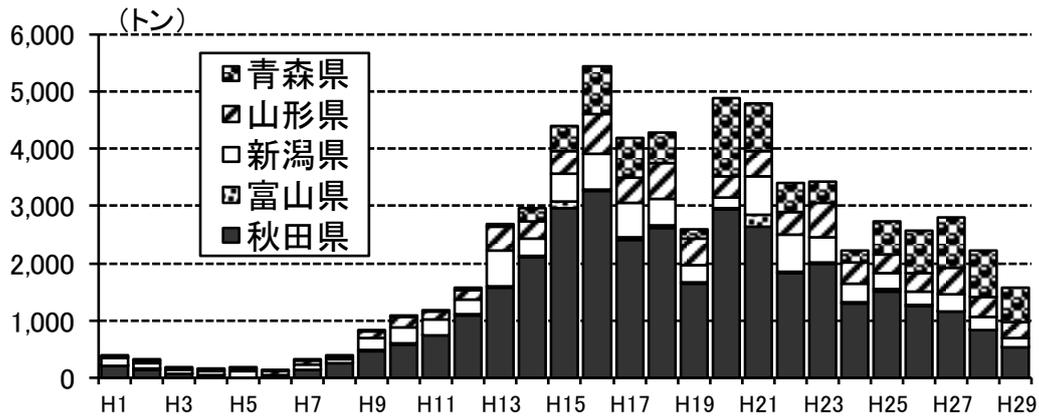


図2 日本海北部5県における漁獲量の推移 (H29年は日本海区水産研究所調べ)

- ◎ H29年の5県漁獲量は1,572トンで、前年より658トン減少した。
- ◎ このうち秋田県の割合は33%で、前年に比べ5ポイント低下した。
- ◎ 県別では、秋田524トン（前年比63%）、青森604トン（同74%）、山形272と（同79%）、新潟163トン（同74%）、富山9トン（同120%）で、日本海北部系群を漁獲するほとんどの県で減少した。

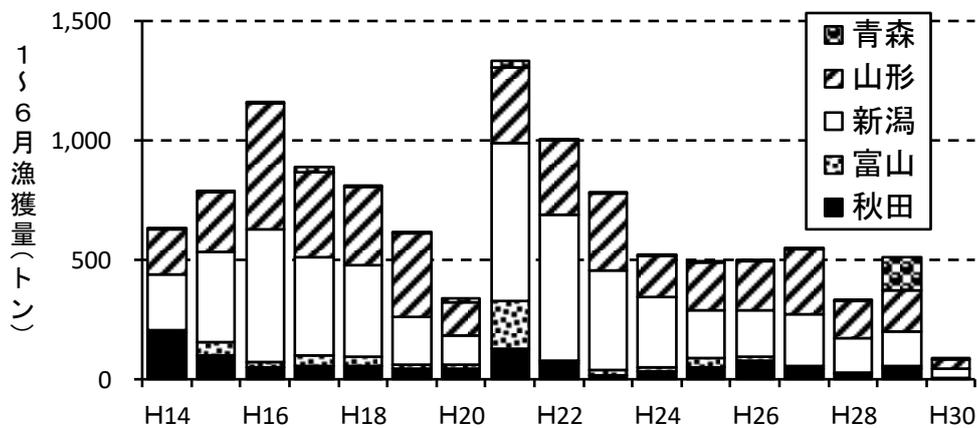


図3 1～6月における日本海北部5県のハタハタ漁獲量  
(H29年まで日本海区水産研究所調べ、H30年は水産振興センター調べ)

- ◎ 本年1～6月の日本海北部（富山県未集計）の漁獲量は84トンで、前年の16%であった。
- ◎ 各県の漁獲量は、秋田5トン（前年比10%）、青森0.3トン（同0.2%）、山形38トン（同22%）、新潟40トン（同28%）であった。

●底びき網での調査結果（成魚：11-12月）

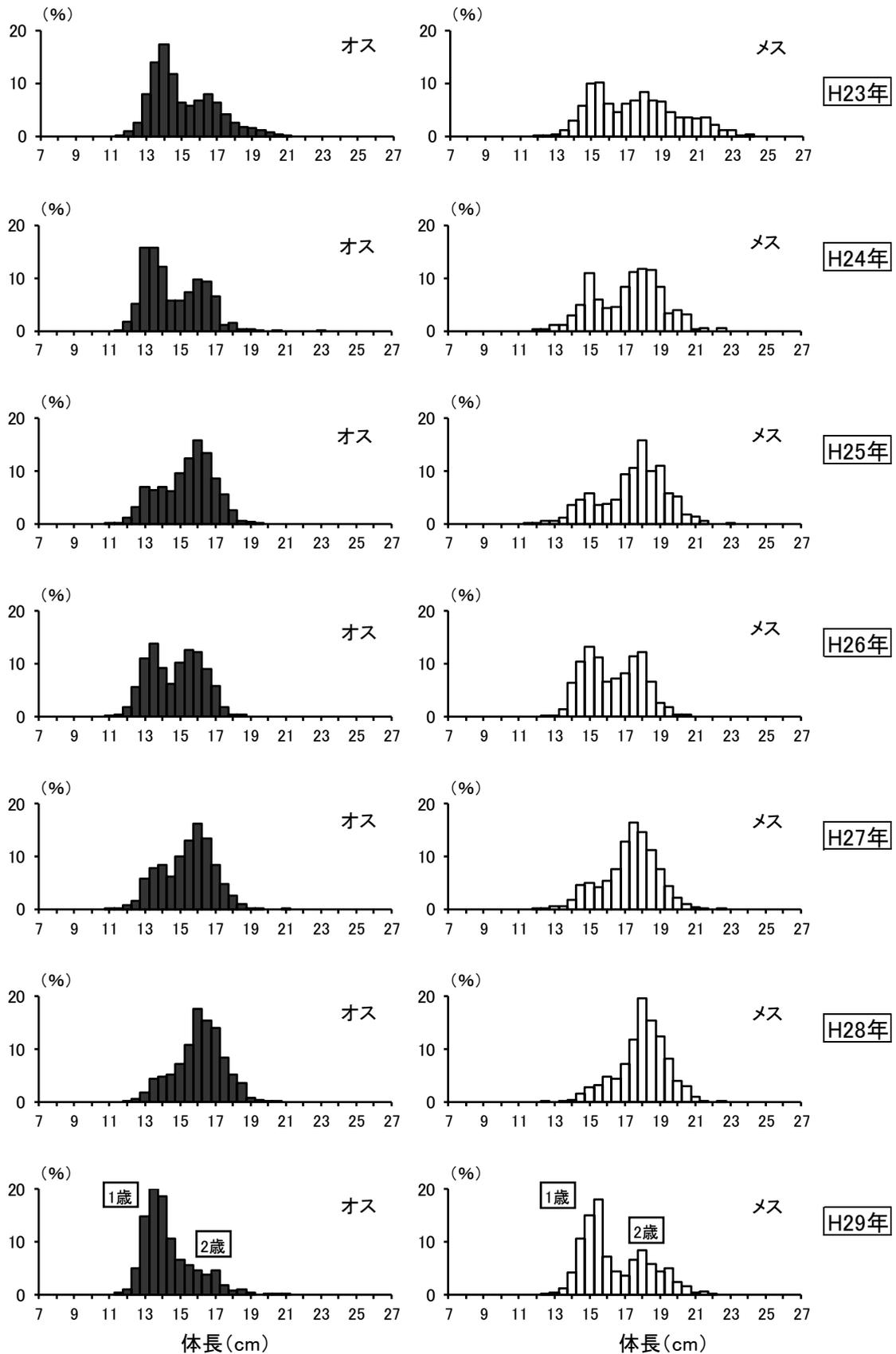


図4 11、12月におけるハタハタ体長組成(H23-29)

【昨年の傾向】

- ◎ 漁獲の中心はH28年生まれ（1歳）であり、漁獲量は低調であった。
- ◎ 2歳は少なく、3歳以上もかなり少なかった。

●底びき網での調査結果（成魚：4-5月）

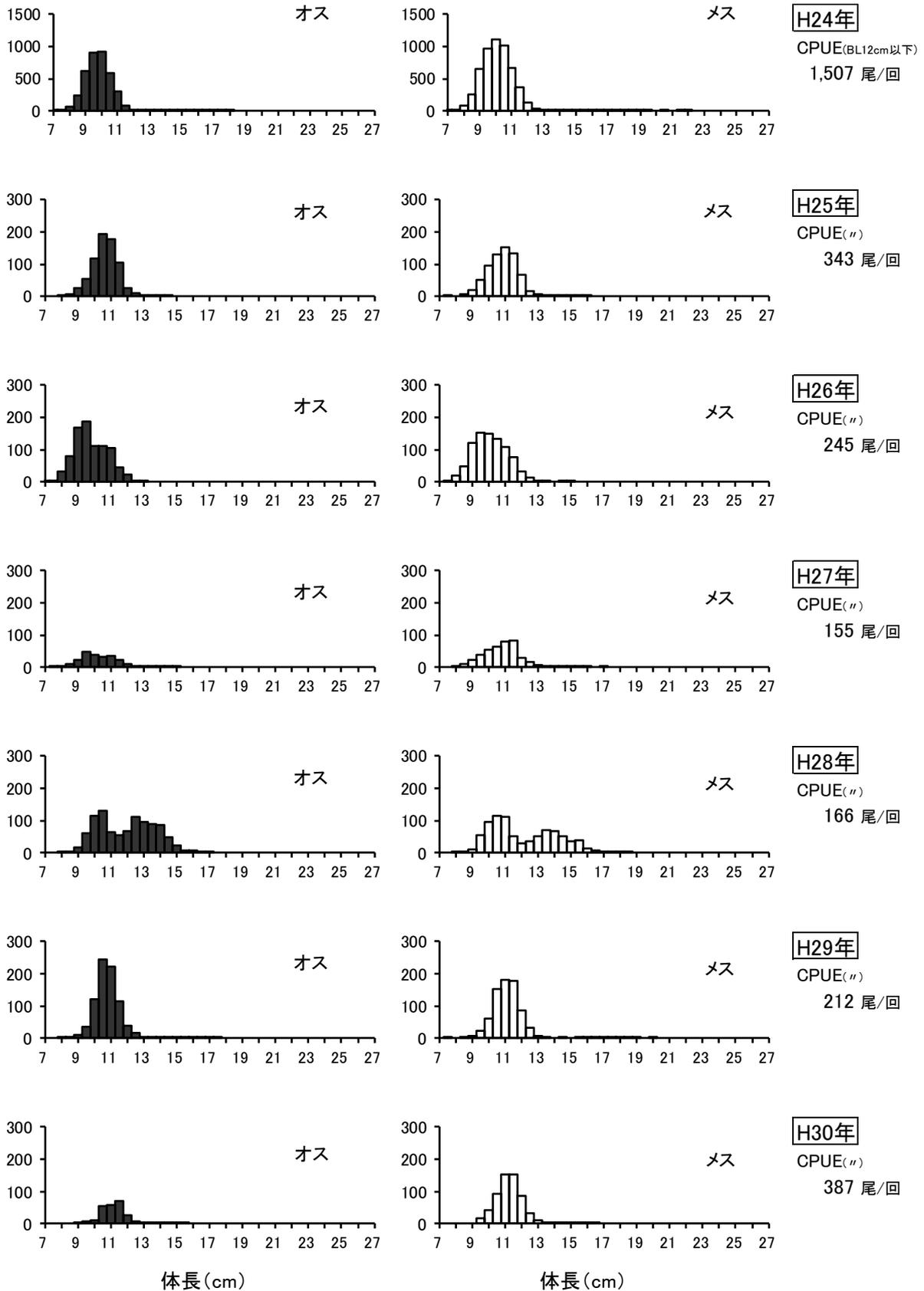


図5 4、5月におけるハタハタ体長組成（H24-30；水深250m以浅）

【今年の傾向】

◎ 今期漁獲される1歳魚の資源量の参考となる4、5月の分布量は、昨年よりもやや多かった。

●調査船での調査結果（成魚：9-10月 ※H30は9月のみ）

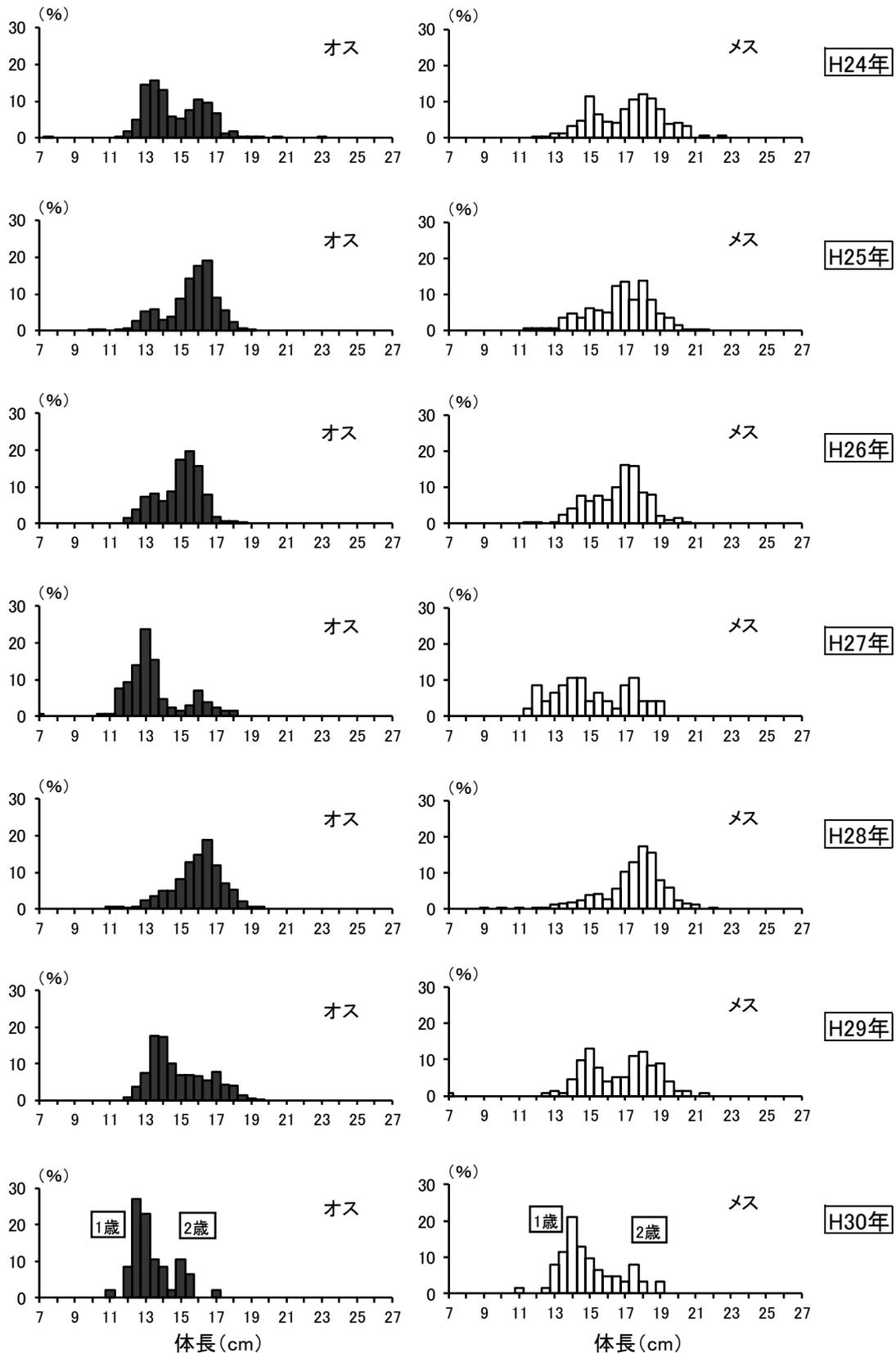


図6 9、10月におけるハタハタ体長組成(H24-30)

(H30年は9月のみ。H24年は用船調査、H25年以降は第六代千秋丸+民間船データ)

【今年の傾向】

◎ 現状ではオス、メスともに1歳（H29生まれ）、次いで2歳（H28年生まれ）の割合が高い。

## 平成 30 年漁期のハタハタ資源量と将来予測

- ◎ 漁獲対象資源量から漁獲枠を決定する従来の獲り方では、その漁獲量が将来的に資源に及ぼす影響を評価できなかった。今後は資源を維持・増大できる漁獲量を将来シミュレーションで推定し、本県の「目標漁獲量」として提案する。
- ◎ 現在の資源状態では漁獲率が高すぎるため、現状の操業を続けると将来的には漁獲量の減少傾向が続く可能性が高い。
- ◎ 持続的に漁獲するためには、今期の漁獲量を約 800 トン（図 7：➡）に抑える必要がある。

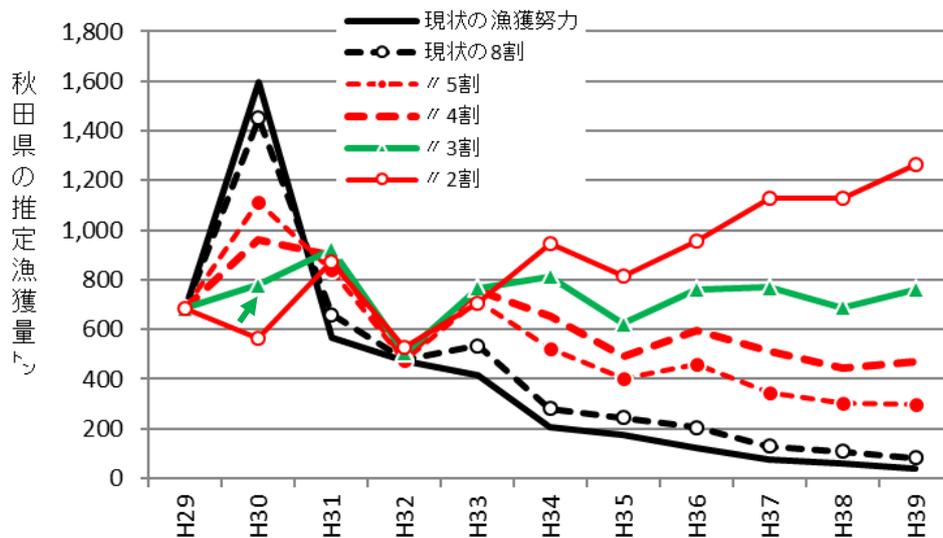


図 7 ハタハタ資源に対する漁獲努力（獲り方の指標値）と本県漁獲量の推移

### 〈図の見方〉

漁獲努力とは、操業隻数や操業日数を反映した指標値であり、水産資源の解析では広く用いられている。

なお、H29 年漁獲量は未報告漁獲量を含めた推定値であるため、図 1 の値とは一致しない。

- ・現状の漁獲努力：直近 3 年の平均的な漁獲努力で操業を続けた場合の漁獲量の推移
- ・現状の 8 割：現状の漁獲努力の 8 割(2 割削減)で操業を続けた場合の漁獲量の推移

⇒漁獲努力を削減すると、この図では H33 年漁期以降の漁獲量に差が生じ、削減幅が大きいほど漁獲量が多くなることを期待できる。

### H30 年漁期の秋田県目標漁獲量：800 トン

- ・ 今漁期の魚体は 1-2 歳（小・中型）が中心で 3 歳以上（大型）は少ない。
  - ・ 2 歳魚の資源量が近年ではやや高いと推定しており、昨年より来遊量の増加が見込まれる。
  - ・ 減少した資源の維持、増大を図るには、獲り残しを増やすことが重要である。
    - 目合拡大により小型魚を逃がす
    - 操業日数や網数を削減する
- } 今年の産卵量と来年以降の資源を確保する

# 秋田県のハタハタ漁獲枠の決定に関する変更点

## 県による資源解析

**データ収集、解析**

- 日本海北部漁獲量
- 体長組成、体重
- 再生産成功率
- 漁獲係数

**日本海北部資源量**

青森～富山の資源量を推定

**秋田県漁獲対象資源量**

日本海北部における本県の漁獲割合から推定

## ハタハタ資源対策協議会

**漁獲枠の決定**

管理期間毎に算定基準を決定

$(\text{秋田県漁獲対象資源量} \times 1/2 \times 0.8 \text{ (H21)})$

→ これまでの流れ

→ これからの流れ

**漁獲量の将来シミュレーション**

日本海北部における今後の漁獲動向を、漁獲努力量に応じて推定

**日本海北部推定漁獲量**

シミュレーションに基づき、資源を維持できる日本海北部の漁獲量の推定

**秋田県目標漁獲量**

日本海北部における本県の漁獲割合から本県の漁獲量を予測

**漁獲枠の決定**

秋田県目標漁獲量と同等が理想



課題

現状の漁獲枠の決め方は資源量に応じて漁獲率（資源に対する漁獲量の割合）を変更することができず、資源変動に対応して管理できない  
→近年は漁獲率が高まり続けている



解決

資源を維持するために必要な漁獲率を基に算出した目標漁獲量を、県が協議会に示し、協議会において漁獲枠を決定する  
→資源量や動向を考慮した、より持続的なハタハタ漁を目指す